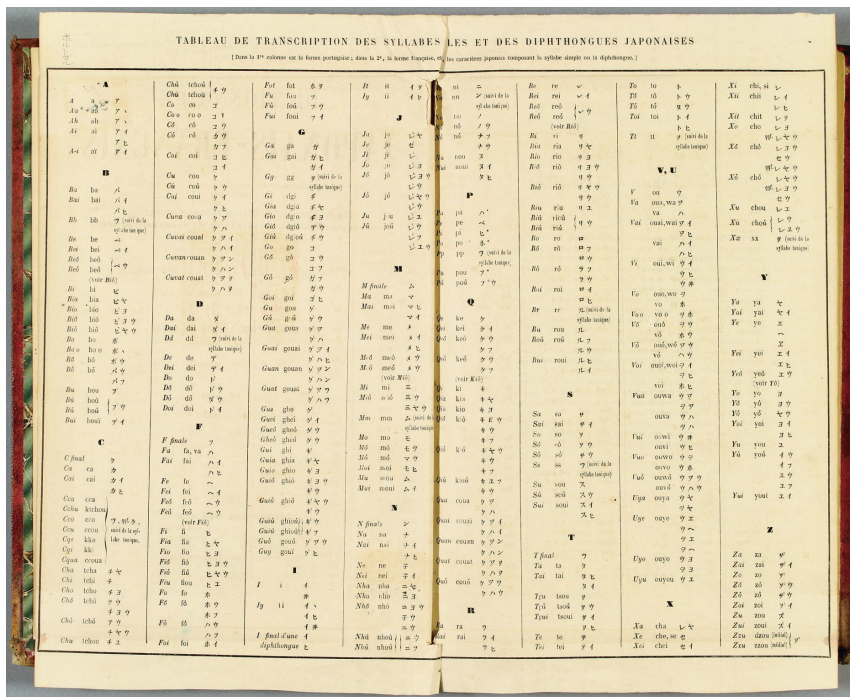


<早稲田の本棚から>

Léon Pagès 「Dictionnaire japonais-français」(日仏辞書)

楊 スヒョン (資料管理課)



日本語が外国語として学ばれた歴史は意外と長い。日本語を習得した外国人は、次の学習者のために教授法や学習方法を文献として残した。これらの記録や文献は各国へと流通し、東洋研究などの学問にも貢献した。

今回は黎明期の日本語教育史において主要な資料の一つである『Dictionnaire japonais-français』(1862)を紹介する。文献について触れる前に、著者レオン・パジェス(1814-1886)について説明したい。外交官として清国のフランス公使館に勤務していた時に、東洋におけるキリスト教布教にパジェスは関心を持った。帰国後フランシスコ・ザビエルに関わる書簡をラテン文からフランス語に訳したことが、日本学を志すきっかけとなった。パジェスは800点余りの日本関係書を年代順に整理して『日本図書目録』(1859)を刊行した。その他にもクルチウス(1813-1879)の『Essai de grammaire Japonaise(日本文典)』(1861)を仏訳で出版した。このように、西洋で日本・日本語研究の基礎を築いたパジェスは、日本語学、古代史の新鋭であるレオン・ド・ロニー(1837-1914)と共に1868年に設立されたパリ国立東洋語学校に日本語講座の初代教授候補者として名前が挙がった。しかし、結果的に教授として任命されたのは、パジェスよりおよそ20歳も若いロニーであったため、彼は深い失意を味わった。

パジェスの日本語に関連する多くの業績の一つである『Dictionnaire japonais-français』は本学図書館に所蔵がある。本文献はキリシタン宣教師の日本語習得のためイエズス会により出版された『日葡辞書』に基づいてフランス語に訳され

た。1862年に4分冊として刊行され、その後1868年に訂正のうえ合冊したものが再刊行された。当館が所蔵しているのは、そのうち、1862年に刊行された第一分冊である。原本となった辞書とは異なり、日本語表記をフランス語式の綴り方に改めた点、またパジェスの創意工夫によってカタカナの発音を付け加えた点が当時のフランスにて画期的な業績として認識された。日本でも『日葡辞書』の翻刻や全訳が出るまでは『日仏辞書』が使われていたという。

今日この辞書は、誤訳と推測される部分もいくつか発見されている。しかし、出版された当時、この辞書は多くの日本語学習者の学びを支えた画期的な日本語文献であった。そして、当時の日本語や日本文化を現す貴重な資料として現代の日本語教育の研究に貢献している。

[主要参考文献]

- ・木村宗男編『日本語教育の歴史』明治書院 1991
- ・関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク 1997
- ・山東功『日本語の観察者たち：宣教師からお雇い外国人まで』岩波書店 2013
- ・関正昭・平高史也編『日本語教育史』アルク 1997
- ・杉本つとむ「J.J. ホフマンとその日本語学の背景—19世紀ヨーロッパの日本語学素描—」『国文学研究』97巻 P112-99, 1989 早稲田大学国文学会
- ・パジェス『日仏辞書』(最終閲覧日：2019/09/18) <https://www.kufs.ac.jp/toshokan/gallery/f-12.htm>
- ・八木正自「Bibliotheca Japonica(117) パジェスの日本研究と辞書編纂」『日本古書通信』72(9) P19, 2007-09 日本古書通信社